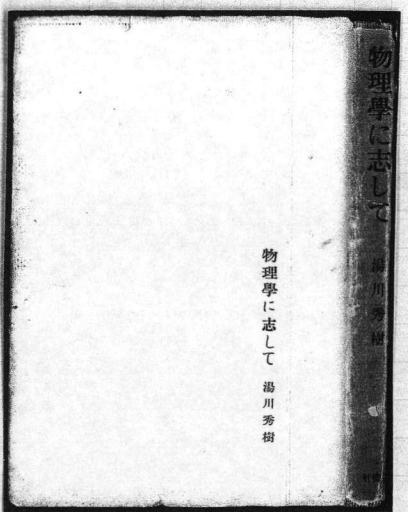


湯川秀樹 ゆがわ ひとしげ 物理學者、理學博士。明治四十年一月二十三日東京生れ、昭和五十六年九月八日歿（一九七二）。地理學者小川琢治の三男、醫家湯川玄洋の養子。昭和四年京都帝國大學理學部物理學科卒。九年中間子理論の構想を發表、のち假説が確認せられる。十四年京都帝大教授、翌年帝國學士院恩賜賞、十八年文化勳章受章、東京帝大教授兼任、二十四年コロンビア大學教授、同年日本人初のノーベル賞（物理學）受賞、二十八年基礎物理研究所初代所長。

著書『β線放射能の理論』（昭和十一年六月十日岩波書店）『科學文獻抄』（『最近の物質觀』（昭和十四年七月十五日弘文堂書房）『教養文庫』（『原子核及び元素の人工轉換・下巻』（菊池正士共著、昭和十五年七月十二日岩波書店）『極微の世界』（昭和十七年一月十七日岩波書店）『原子核及宇宙線の理論』（坂田吾一共著、昭和十七年十一月二十一日岩波書店）『存在の理法（現代物理學の根本問題）』（昭和十八年七月十五日岩波書店）『物理學の志して』（昭和十九年四月二十日甲爲書林、養徳社）、『理論物理學講話』（昭和二十一年七月十日大阪・朝日新聞大阪本社）、『科學と人間性』（昭和二十二年一月十五日國書院）、『原子力時代に於ける基督教—新島講座記念論文集』（合著・有賀鐵太郎編、昭和二十二年一月十五日京都・聖光社）、『素粒子論序説・上巻』（昭和二十二年五月十五日岩波書店）、『續わが飾わが友』（合著、昭和二十六年十月二十日筑摩書店）



物理學に志して 湯川秀樹

- 房)、『旅人—ある物理学者の回想』(昭和二十二年十一月)、『岩波新聞社』、『素粒子』(共著、昭和二十六年九月)、『岩波書店』、『岩波新書』(一)、『現代科学と人間』(昭和二十六年十月)、『岩波書店』、『平和時代を創造するたのび—科学者は訴える』(共著、昭和二十八年一月)、『岩波書店』、『岩波新書』(一)、『本の中の世界』(昭和二十八年七月)、『岩波書店』、『岩波新書』(一)、『日本文化の創造』(一)、『上田正昭共著、昭和四十三年二月)、『京都・雄渾社』、『核時代を越える—平箱の創造をめざして』(共著、昭和四十二年八月)、『岩波書店』、『岩波新書』(一)、『宇宙と心の世界』(谷川徹二対談、昭和四十四年十一月)、『読売新聞社』、『読売選書』(一)、『学問の世界—対談集』(編、昭和四十五年四月)、『岩波書店』、『外的世界と内的世界』(昭和五十一年十一月)、『岩波書店』、『核重縮への新と心構え』(共編、昭和五十一年八月)、『岩波書店』、『Scientific World』(湯川秀樹論文集)』(昭和五十四年二月)、『岩波書店』(等)。
- 文献、神田文三著『ひいちやん物語—湯川秀樹博士の少年時代』(昭和二十四年十一月)、『千代田大学』、『子と母の学習文庫』(一)、『真下五一著』、『ソール賞』、『湯川秀樹物語』(昭和二十五年二月)、『白雲堂』、『日本』、『随想湯川秀樹』(合著、昭和二十五年十一月)、『甲文社』(等)。